

【本文】

九十五種世をけがす

唯仏 一道きよくます

菩提に 出到してのみぞ

火宅の利益は自然なる

親鸞さまの

【意訳】

世の様々な考えがこの世を乱しています

幸い私たちには仏教があり、仏様になる唯一の道が開かれています。

極楽浄土に到り、仏様にならせて頂いてこそ、

この混乱した現世を導く真の利益になりません。命終えて仏様に成り、仏様として後の人の為尽くす身となることは、全て阿弥陀様のお救いのおかげなのです。

【私の味わい】

「火宅」とは、お経の中にある言葉です。立派な邸宅の中に家族が暮らしていますが、周囲が大火に包まれていることに気が付いていない様を説いています。では、その火とは何を言い表しているのでしょうか。それは、人の煩惱を指しています。

煩惱という言葉は、「子煩惱」という言葉として知られています。子供をととても可愛がる様子の語ですが、「煩惱」とあります。それは、いかに美しくとも自分の「子」だからであつて全くの他人の「子」ではありません。また、時に親心の美名のもと、子を束縛していく心にもなりましょう。つまり、自分の「子」、自分の思いを中心にした心という裏側を持った心をあえて「子煩惱」と言っているのでしょう。

お釈迦様は、その自分中心の心の盛んな様を火に例えておられます。この世間は、人の数ほどの火に満ちており、自説を言い募つて互いを焦がし、その熱さに苛まれる日常を、知らず知らずのうちに過ごしている、と説いておられるのです。

本来ならば、火の中に生まれて、火として生き、火として終わっていくはずの私を、阿弥陀様は憐れんでお浄土に迎え、仏と成らせて下さいます。そして、勿体なくも阿弥陀様のお手伝いをさせていただく仏と成つたその上は、再び火中の世間に還つて、火たる己の姿を知らせるとともに、阿弥陀様のお慈悲を伝える身となるのです。仏事の全ては亡きお方が仏様として、阿弥陀様に引き合わせて下さっている貴重な瞬間でありましょう。そう思つてお勤めさせて頂きたいものです。